

## 語源から考える「文明」

「文明」という言葉は、何か壮大なイメージを喚起する一方で、日々の生活のなかで生じる具体的な出来事と結びつけて用いられることが少ない。実際、検索エンジンで「文明」と入力して画像の検索結果を眺めてみると、古代文明の分布が記された世界地図や、ピラミッドを始めとする古代の巨大建造物の写真が上位を占める。英語で「civilization」と入力すると多少結果が変わる印象を受けるが、これは同名タイトルで発売されているビデオゲームの画面イメージが上位に位置しているためで、少しスクロールしてみると日本語の場合と同じように古代の建造物の写真が増えてくる。

しかし、もともと「文明」という言葉が用いられ始めた当初、事情は大きく違っていたようである。よく知られている通り、現在の意味で「文明」を日本語で初めて論じた書物は、福澤諭吉の『文明論之概略』（1875、以下の引用は1931年岩波文庫版）である。同書で福澤が強調しているのは、科学技術の知識と自由主義経済を基盤として発展したヨーロッパ諸国の「西洋文明」から学びつつ、いかにして日本を独立した国家として確立できるか、という論調である。福澤は、英語で「文明」という概念が「野蛮 (savage)」に対比されることを念頭に置きつつ、以下のように文明の定義を論じている。

「文明とは人間交際の次第に改りて良き方に赴く有様を形容したる語にて野蛮無法の独立に反し一国の体裁を成すと云ふ義なり」(p. 45)

「文明とは人の身を安楽にして心を高尚にするを云ふなり衣食を饒にして人品を貴くするを云ふなり」(p. 48)

「文明とは人の安楽と品位との進歩を云ふなり又この人の安楽と品位とを得せしむるものは人の智徳なるが故に文明とは結局、人の智徳の進歩と云て可なり」(p. 48)

これらの引用から見て取れる興味深い点は、福澤が「衣食足りて礼節を知る」という故事の発想になぞらえて文明を論じていることである。文明は、人々の身を安楽にして心を高尚にし、結果的に人々の品位を向上させることである。それは、衣食住のように人々の生活を物質的に豊かにすることだけでも成り立たないし、貧しいまま品位だけを正しくすることを精神的に求めても成り立たない。人々の生活の物質的な次元と精神的な次元、両者がともに向上するというのが文明であり、それは結局、ひとつの国家をとともに形成する人々の「智徳の進歩」によって可能になるという。

語源から考えてみても、人々の振る舞い方が一定の方向に向かって進歩していくことは「文明」の定義に見合う。文明に対応する英語 civilization は、「civil = 市民の、市民的な」に接尾辞「-ize = 化する」が加わって「civilize = 市民化する」という動詞になり、さらに、動作・結果・状態を表す接尾辞「-ation」が加わったものである。したがって、civil-ize-ation の語源的な意味は、「市民化していく過程」や「市民化した結果」ということになる。つまり、「civilization」という言葉は「市民」とは必ずしも呼べなかった状態にあった人々が、一定のしかたで「市民」と呼ぶうる存在に変化していく動的なプロセスをもととは意味するのである。市民的 (civil) の語源にはラテン語 civitas (都市：英語 city) があるので、ここでいう「市民」は、基本的には都市に住む人々のことを指す。

こうして、語源に問い尋ねてみると、「文明 (civilization)」とは、「都市に生活する人としての市民になっていく過程」を意味することになる。福澤はここで言う「都市」を近代的な国民国家という当時

の文脈でとらえ、文明を国民全体の「智徳の進歩」だとした。では、現代の私たちはどのような観点で「都市」をとらえ、そこに生活する人々である「市民」を考えればよいのだろうか。また、そこで要請される市民化の過程である「文明」をどのように構想すればよいのだろうか。文明が「市民化」という動的なプロセスであるとするなら、市民としての人々がどこからどこへ向かおうとしているのか、あるいは向かうべきなのか、一定の見通しとともに提示されるのであれば、文明について何かを考えたことにはならないだろう。

グローバル化、情報社会、地球環境問題など、現代における文明を語るうえで重要な文脈はいくつもある。しかしここでは、あえて近代社会の問題について一言述べておきたい。精神分析家であり社会心理学者でもあったエーリッヒ・フロムは、その主著『自由からの逃走』（1941、以下の引用は日高六郎訳・1951年東京創元社版）において、近代社会に生きる人々の自由をめぐる逆説的な行動について指摘している。フロムによると、近代社会は合理主義的な価値観にもとづいて、中世以来の封建的身分制を廃止し、人々に市民としての自由を保障する方向で進歩した。具体的には、市民革命によって身分制が廃止されただけでなく、産業革命と資本主義の進展によって農村という地域共同体の束縛を離れて都市で生きられるようになった。

ただ、こうして、自分の生き方を自分で決められるという基本的な自由を手にした人々は、他方で、家柄や帰属先だけで人生が定まらないことも自覚するようになり、一種の寄る辺なさの感情を抱え込むことになってしまったのである。フロムは次のように指摘する。

中世社会の伝統的な絆から自由となったことは、個人に独立の新しい感情をあたえたが、それと同時に、個人に孤独と孤立の感情をもたらし、疑いと不安でいっぱいにし、新しい服従と強制的な非合理的活動へ個人をかりたてた (p. 120)

フロムの著作は、1930年代のドイツを生き抜いた人々が、なぜ民主的な社会で自由を謳歌しながら、かえって逆説的にナチス・ドイツの全体主義を支持する方向に流れてしまったのか、という問題意識から書かれている。彼によると、近代社会は生き方の自由を肯定した社会なのだが、その自由を受け止めかねて不安になった人々が自由から逃走し、全体主義を招来したのである。

現在の社会について、1930年代に一脈通じる状況が訪れつつあると感じている人々が多いのではないだろうか。人々は、社会が目まぐるしく変化する中で自分の生き方を定められず不安を抱え、カリスマ的な指導力のあるリーダーが登場するとそうした人物に何かを期待してなびいてしまうように見える。あえて名前を出さなくても、読者の念頭に思い浮かぶ世界政治の指導者は複数いるだろう。私には、現代社会のこのような傾向が「市民化」のあるべき姿であり、「文明」であるとはやはり思えない。近代社会が獲得した自由を捨てる方向ではなく、その自由内に内在する可能性と限界を見据えたうえで、あるべき社会と個人の姿を見出すことこそ、今日の文明論として必要な作業ではないだろうか。

東海大学文明研究所所員  
現代教養センター教授  
田中彰吾